

週末アクターズ『窓／アンネ・フランクに捧ぐ』

作・演出 HARUTA サーカス

登場人物

ニーナ・ゲルト・・・ハンスの娘 ソロモンとの恋に苦悩する

ハンス・ゲルト・・・ドイツ軍少佐 妻を亡くし娘を溺愛する父でもある
シスター・hana・・・秘密のミサを続ける修道女

ソロモン・・・ボーランドから来たレジスタンス

コニー・・・ハンスの友人でソロモンの支援者 クリストヤン

リーケ・・・コニーの妻 陽気で元気な情愛深い女性

アンニヤ・・・コニーの娘 かわいいお転婆

ヤン・・・新聞記者 やや無鉄砲な青年

ルドルフ・ハンセン・・・ゲシュタポ(ナチス秘密警察) 冷酷無比

ヨーゼフ・アドラー・・・ナチス高官 ハンスの上司であり盟友

アビ・・・・オランダ籍のユダヤ人

マルゴー・・・アウシュビッツに連行されたユダヤ人女性
カール・・・ドイツ郊外の若い農場主 アンニヤを保護する

フローラ・・・カールの妹 アンニヤを世話する

サニー・・・ニーナの曾孫の女児

クロフォード医師・・・ハンスの主治医 精神科医

愛犬ソロモン・・・サニーの愛犬

ナレーション・・・93歳のニーナ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◇プロローグ ニーナの庭

愛犬と庭で遊ぶサニーの笑い声。

サニー「あははは、だめよソロモン、それは食べてはいけないわ。ほら、かえして！あ！ソロモン！・・・もう、お腹を壊してもしらないから」

ニーナ（93歳）「サニー、こっちへ来てお茶にしない？あなたの好きなラズベリーのタルトが焼けたわよ」

サニー「わー、素敵！わたし、おばあちゃんのタルトが世界で一番好きよ！」

ニーナ「あらあら、世界一だなんて嬉しいわね。さ、たんと召し上がり

サニー「いただきまーす！（もぐもぐ）おいしい！」

ニーナ「そう、よかつたわね」

サニー「おばあちゃんは世界で一番何が好き？」

ニーナ「私？・・・そうね、私が一番好きなもの、それは平和よ」

サニー「平和？・・・ふーん」

N（ニーナ93歳）「1945年。私は、父親と一人でドイツのベルリンにある小さなアパートメントで暮らしていたわ。戦争は日に日に激しくなつて、窓の外から聞こえてくる行進の音がとてもこわかった。父親はドイツ労働者党の高官だつたけれど、本当は戦争を憎んでいたのよ。優しい人だつた」

◇ハンス家

ニーナ 「おかえりなさい、父さん」

ハンス 「ああ。変わりはなかつたかい？」

ニーナ 「ええ、何も。寒かつたでしよう？ いま暖かいコーヒーを入れるわ」

ハンス 「コーヒーは・・・いいよ」

ニーナ 「？・・・じゃあ、暖炉に薪をくべますね」

ハンス 「ありがとうございます、ニーナ」

ニーナ 「今日もたくさんの人達が、連れて行かれますね」

ハンス 「・・・ああ、そうだね」

ニーナ 「父さん・・・どうにもならないのかしら・・・こんなことがいつまで続くの？」

ハンス 「ニーナ、そんなことを口にしちゃいけない。お前に何かあつたら、父さんは・・・」

ニーナ 「ごめんなさい・・・でも、ユダヤ人というだけでなぜそこまでするの？あの男は気狂いよ！どうかしてる！血に飢えた悪魔よ！」

ハンス 「ニーナ！ やめないか！ 総統（フューラー）の事は口にするなと言つていいだろう！ どこで誰が聞いているとも分からんんだぞ！」

ドアがノックされる音。

ハンス 「しつ！ 静かに・・・どなたですか？」

シスター 「私よ、ハンス」

ハンス 「息を吐き）どうぞ、シスター」

シスター 「どうしたの？ 大きな声が聞こえてたわよ。ニーナ、こんばんは。変わらない？」

ニーナ 「ええ、シスター。ごめんなさい、少し父と喧嘩を」

ハンス 「たいしたことじやありませんよ、ご心配なく」

シスター 「ならいいけど。ところで、もうそろそろ時間ね。今日は何人くらいいらっしゃるのかしら？」

ハンス 「私たちを入れて、7人です」

シスター 「そう・・・だいぶ寂しくなつたわね」

ハンス 「はい・・・政府によるキリスト教会への弾圧は日増しに強くなつていま

す。今後いつまで、こうして秘密裏に集まつてミサを開けるのか・・・時間の問題でしよう」

ニーナ 「カトリック修道者たちがドイツ国外に金を密輸したなんて噂が広まっていますね」

シスター 「デマですよ。ナチスはローマにまで銃口を向け、あらたにドイツ・キリスト教を奨励し始めました。あの忌まわしい鉤十字を旗印に」

ドアをノックする音。

ニーナ 「あ、来たわ」

部屋に入つてくるリーケ、コニー、アンニヤ、ヤン、そしてソロモンの4人。

ハンス「やあ、コニー、リーケもよく来たね。アンニヤ、元気だつたかい？」
コニー「ハンス、久しぶりだな」

握手を交わすハンスとコニー。

リーケ「まったくお転婆で困つているのよ」

アンニヤ「ふん！ママに似てゐるねつて、みんな言うわ。ね、ソロモン」

ソロモン「あ、ああ・・・」

ヤン「ハンスさん、おじやまします」

ハンス「やあ、ようこそ、ヤン君。新聞社の仕事の方はどうだい？」

ヤン「別に相変わらずですよ。最近じや上に言われたことを、だらだらとタイピングしてゐるだけですからね。今日もまたソヴィエト軍を追撃！モスクワ陥落近し！」つてね。いけね、ハンスさんは少佐殿でしたね。忘れてください、なにとぞ穩便に」

ハンス「(笑) 愉快な男だな・・・ところで、彼は？」

ニーナ「あ、父さん、紹介するは？」

ソロモン「初めまして、ハンスさん。突然おじやまして申し訳ありません」

リーケ「ごめんなさい、ハンス。あなたが警戒するのはよくわかつてゐるわ。敬虔なクリスチャンだった奥様が、ナチスの目を逃れながら守つてきた秘密のミサですもの。知らない人間がいきなり現れたら不審に思うのも無理はないわね。でも、ソロモンは大丈夫よ。アンニヤの従兄弟なの。コニーの兄弟の息子さん。心配はいらないわ」

ソロモン「ソロモン・ベルンハルトといいます。実は、ハンスさんにお願いが」

ニーナ「ソロモン！」

ハンス「? どうした、ニーナ」

ニーナ「ソロモン！・・・ そうよね？」

ソロモン「! ・・・ええ、目立つことは出来ないから、何かいいお知恵をお借りできないかなと、思つて・・・これでいいの？(つねられ) 痛つ！」

ニーナ「とりあえず、みんな揃つたし、ミサを始めましょ！シスター、宜しくお願いします！」

シスター「いいのかしら？ハンス。はじめさせていただいて」

ハンス「・・・ええ、始めましょう」

ミサの準備を始める一同。

◇ニーナの庭

ニーナ(93歳)「ソロモン。私が人生ではじめて好きになつた人よ」

サニー「えー！ソロモンと同じじやない！」

ニーナ「あははは、大当たり」

サニー「ソロモン！あなた聞いた？あなたの名前はおばあちゃんの初恋の人よ」

◇ハンス家

ニーナ「今日も素敵なミサだつたわね。それにアンニヤつたらずいぶんおませになつてたわ。ね、そつは思わないこと?ねえ・・・父さん?」
ハンス「ずいぶん親しそうだね」

ニーナ「え?」

ハンス「ゾロモン・・・いつから」

ニーナ「・・・1ヶ月くらい前です」

ハンス「1ヶ月?・・・コニーの家でかい?」

ニーナ「・・・はい。11月のアンニヤの誕生日パーティーの日に」

ハンス「なぜ、黙つていた?」

ニーナ「そんな・・・次のミサの日に、今日の事ですけど、ちゃんと紹介しよう

と思っていたんです」

ハンス「じやあ、なぜ」

ニーナ「父さんが!・・・父さんが彼を避けているみたいだつたから、なかなか切り出せなくて・・・」

ハンス「まさか、結婚を前提になどとは言わないだろうね」

ニーナ「・・・・・・」

ハンス「ニーナ?」

ニーナ「はい、父さん。わたし、わたしたち真剣に愛し合つてゐるんです」

ハンス「なんだつて」

ニーナ「彼は・・・来年の春がきたら、結婚しようつて、そう言つてくれました」

ハンス「何を馬鹿な!」

ニーナ「父さん!」

ハンス「全体に駄目だ!許すことなど出来ない!出来るわけがない!」

ニーナ「父さん!どうして!?彼のどこがいけないの?私は幸せになつてはいけないといの?」

ハンス「なにを言つてるんだ!私はお前の幸せだけを」

ニーナ「だつたらどうして!・・・ねえ、父さん、お願ひよ・・・私の話をちゃんと聞いて」

ハンス「・・・駄目なものは駄目だ・・・」

ニーナ「・・・寂しいから!?母さんが死んで、私がこの家を出て行つたら、自分がさびしいから、だから結婚を反対するの!?」

ハンス「そうじやない!そうじやないんだ」

ニーナ「じやあなぜ!?なんだつていうのよ!」

ハンス「彼は駄目なんだ!・・・彼だけは」

ニーナ「・・・なによ・・・彼がなんだというの?」

ハンス「ゾロモン・ベルンハルト・・・まぎれもなく、ユダヤ人の名前だ」

今日も聞こえてくる行進の喧騒。

N「父、ハンス・ゲルトは差別主義者ではなかつた。だけど、自分の娘がユダヤ人と結ばれた先に訪れるであろう不幸を恐れていたわ。だけど、私たちを待つていたのは、恐れていたもの以上の、あまりにも残酷な未来だつた」

◇コニー家

ささやかなパーティーを開いている。

シスター「天にまします我らの父よ、あなたの御子イエスをこの地上に送つてくださりありがとうございます。私たちにとつて人生がいつも樂であるとは限りません、しかしながらがいつも私たちと共にいてくださる事を知っています。あなたのことばにあるように、あなたは決して私から離れる事はなく、私を見捨てる事もありません。私たちに一致をくださり、またいつも必要を満たしてくださりありがとうございます。来る年も私たちの絆が強まりますように。あなたを心から愛します、そして今日の祝日が私たちにとつて、素晴らしい日となりますよう。イエスの御名によつて、アーメン」

みんな「アーメン」

リーケ「さあ、食事にしましよう。何もないけれど、腕によりをかけたのよ」

コニー「リーケのミートパイは最高だからね」

アンニヤ「母さん、私、手伝うわ」

リーケ「まあ、めずらしい。じゃあステップの準備をお願いするわね」

シスター「なんだか少し、アンニヤは大人っぽくなつたわね」

コニー「そうですか？シスター、僕にはまだまだ」

アンニヤ「ありがとうございます。シスター！父さんは時々しか私と話をしないから気づかないのよ。ねえ、母さん」

リーケ「そうね、このところは特に難しい顔ばかりして（笑）」

コニー「仕方がないだろう、仕事がいそがしいんだから」

シスター「家族のために頑張つてているのに、家族にいろいろ言われたんじやコニーも可愛そうね（笑）」

アンニヤ「それはそうね。父さん、ごめんなさい。父さんは一番大きなミートパイをあげるわね（笑）」

コニー「まいったなあ（笑）」

一同、笑い。（アドリブ）

ソロモンが帰つてくる。

ソロモン「ただいま。いやあ、外はすごい雨ですよ」

アンニヤ「おかえりなさい、ソロモン」

コニー「おかえり、ソロモン」

ソロモン「ただいま、おじさん。すみません、お祈りの時間までには帰るつもりだつたんですが」

コニー「ソロモン・・・あまり、不必要にうろつくんじゃないぞ」

ソロモン「僕なら大丈夫ですよ、おじさん。逃げ足だつて早いし」

コニー「ソロモン、ふざけている場合じや」

激しくドアをたたく音。

リーケ「・・・何かしら？」

ルドルフ（ゲシユタポ）「開ける！今すぐドアを開ける」

コニー「いかん！ゲシュタポだ！……アンニヤ！ソロモンと一緒に奥の部屋に隠れていなさい！」

アンニヤ「どうして隠れなきやいけないの？なにも悪いことなんかしてないのに」

コニー「いいから言うことをききなさい！ソロモン、行きなさい！早く！」

ソロモン「……でもみんなは！？」

コニー「行け！頼むから行ってくれ」

ソロモン「……はい、アンニヤ行こう」

コニー「……何があつても出てくるなよ。いいな、ソロモン」

ソロモン「……わかりました」

奥の部屋に隠れるソロモンとアンニヤ。

それと同時に飛び込んでくるゲシュタポ。部屋の中を見回す。

ルドルフ「コニー・ローゼンハイム」

コニー「……はい」

ルドルフ「国家反逆罪の容疑で逮捕する」

リーケ「コニー！」

コニー「静かに！リーケ」

ルドルフ「半年前から内偵は進行していたんだ。お前はナチ党員にも関わらず、国家の発展を妨げている」

コニー「そんな……」

ルドルフ「言つてみろ」

コニー「……は？」

ルドルフ「ハイル・ヒトラーと言つてみろと言つてるのだ」

コニー「……はい……ハイル・ヒトラー……」

ルドルフ「声が小さくて聞こえん。もう一度」

コニー「……ハイル・ヒトラー！」

コニーに近づき、胸元を探るゲシュタポ。衿の内側からロザリオを引っ張り出す。

ルドルフ「これはなんだ？」
コニー「……」

ルドルフ「貴様、この十字架はなんだと聞いているんだ！」

シスター「おやめください！」

ルドルフ「何でお前は？ははん、お前は聖職者だな？」

コニー「違います！違います！この人はただの友人で、夕食に招いただけで」

ルドルフ「ふざけるな！」

コニー「……嘘じやありません……」

ルドルフ「国民が總統（フューラー）と共に一丸となつて戦つているというのに、貴様らはのんきに飯を食いながら、禁じられた異端の教義に頭を垂れないと

いうのか！？」

コニー「……お許しを……どうかお許しを……」

ルドルフ「許す許さないは私が決めることではない。全て、總統（フューラー）

閣下がお決めになることだ」

シスター「この二人を許してあげてください。彼らは今日の事を境に信仰を閉ざし、心を改めて我が国家のために尽くすことでしょう。しかし私は生まれた時から、イエス・キリストとともに歩んできました。今後も決して信仰が揺らぐことはないでしょう。そんな私のような聖職者が消えてゆけば、あなた方の理想へ近づけるのではないですか？国民は国力の象徴です。いたずらに肅清して何になりますか？ね？私を、私だけを連行してください。あなたにも家族があるはずです。私は一人、私には主イエスだけです。ね？どうか、どうかこの二人を連れて行くことはやめて・・・」

ルドルフ「（微笑む）」

シスター「ああ・・・神よ」

ルドルフ「何と言つた貴様。この場でイエスに会わせてやろうか？」

拳銃をシスターに突きつける。

ルドルフ「ソロモン、ソロモン・ベルンハルトはどこだ？」

コニー「・・・」

ルドルフ「内偵は済んでいると言つただろう。ポーランドから忍び込んできた薄汚い鼠はどこだと聞いているんだ」

コニー「・・・いない」

ルドルフ「いない？」

コニー「そんな奴は知らない・・・ここにはいない」

ルドルフ「そうか、いないんだな。それじゃあ、その奥に隠れているお嬢さんにご挨拶だけさせてもらおう」

コニー「やめろ！やめてくれ・・・娘は関係ないんだ、何も知らないんだ」

ルドルフ「もう遅い」

部屋に入ろうとするゲシュタポ。逆上したコニーがミートパイのナイフをつかむ。

ルドルフ「どうした？そんな安物のナイフで何をしようって言うんだ？」
コニー「んぐう・・・があー！！」

叫びながらゲシュタポに襲い掛かるが、撃たれて床に倒れるコニー。

リーケ「コニー！」

ルドルフ「奥の部屋を見てこい」

部下「は！」

戻つてくる部下。

部下「いません」

ルドルフ「逃げられたか。シスター、お望み通り、お前だけ連れて行こう。かわいそだから、夫婦は一緒にしてやろう」

リーケを撃つゲシュタポ。かわいた銃声

シスター 「リーケ！・・・ ああ・・・」

ルドルフ 「行くぞ」

運行されるシスター。

◇ハンス家
ノックの音。

ハンス 「・・・ どなたですか？」

ルドルフ 「私です。ハンス少佐」

ハンス 「・・・ 入りたまえ」

ルドルフ 「夜分に失礼いたします」

ハンス 「ルドルフ・・・ どうしたんだ？ こんな時間に」

ルドルフ 「は。時間も時間ですので要点だけお伝え致します。実は、内偵を進め
ていたレジスタンスの支援者の家に、国家反逆罪の容疑で、先ほど踏み込みまし
た」

ハンス 「・・・ そうか。それで？」

ルドルフ 「小佐もよく『存じのコニー・ローゼンハイムの家です』

ハンス 「・・・ なに？」

ルドルフ 「コニー・ローゼンハイムはナチ党員です。それにもかかわらず、やつ
はポーランドから潜入してきたレジスタンスを支援しておりました。自宅にか
くまいながら」

ハンス 「・・・ 」

ルドルフ 「ポーランド系ユダヤ人、ソロモン・ベルンハルト、『存じないです
か？』

ハンス 「・・・ 」

ルドルフ 「小佐、ヒトラーユーゲント 時代のよしみでお伝
えに上がりました。奴はコニーの娘をつれて逃走しました」

ハンス 「！」

ルドルフ 「『』自重くださいますね？ 私もつらいところです。あなたを逮捕するよ
うなことになるのは忍びない」

ニーナ 「アンニヤが・・・」

ハンス 「・・・ 私にどうしろと？」

ルドルフ 「もし何かわかつたら、必ず私に連絡をください。いいですね？」

ハンス 「・・・ わかった」

ルドルフ 「亡くなられた奥様が敬虔なクリスチヤンであつたことは存じていま
す。しかし、時代は変わつたのです。今、信奉すべきはナチズム、お分かりです
よね？」

ハンス 「・・・ 妻の話は、やめてもらおう」

ルドルフ 「失礼しました。それでは私はこれで」

帰つていくルドルフ。

ニーナ 「ソロモンがレジスタンスですつて？ そんな、そんな馬鹿な」

ハンス「・・・彼はおそらく、情報を探るためにお前に近づいたんだ。お前と仲良くなつて私が軍部の情報を探ろうと」

ニーナ「違うわ！彼はそんな人じやない！何てひどいことを言うの！いくら父さんでも許さない！」

ハンス「もういい！・・・彼とおまえは、もう終わったんだ・・・とにかく、コニーの家に行つてくる。コニーが心配だ。」

出ていくハンス。泣き続けるニーナ。

N「その時の私には、いったい何が起きたのかよくわからなかつたわ。ただただ、愛する人を失うかもしれない恐怖と絶望感で、一晩中泣いているしかなかつた」

◇ヤンの家

ヤン「大丈夫、つけられてはいないようだね」

ソロモン「すまない、ヤン。恩にきるよ」

ヤン「いいつてこと。だけど・・・アンニヤは、大丈夫かい？」

アンニヤ「(泣き続いている)」

ソロモン「(首を振る)」

アンニヤ「私、家に帰らなきや。父さんと母さんを置いてしまつたもの」

ソロモン「アンニヤ！駄目だよ・・・今ここを出ちゃいけない」

アンニヤ「なぜ？何も悪いことしてないのに、なんで出てはいけないの？・・・

父さんと母さんに何かあつたらどうしよう・・・帰らなくちゃ」

ソロモン「駄目だ、いけないよアンニヤ！・・・アンニヤ、聞いてくれ、お願ひだ、落ち着いて、アンニヤ・・・アンニヤ！」

アンニヤ「・・・」

ソロモン「アンニヤ・・・落ち着いて聞いておくれ。僕は・・・君の従兄弟なん
かじやないんだよ」

アンニヤ「・・・え？それ、どういうこと？従兄弟じやなつて・・・じゃあ、誰？
あなたは誰なの！？」

ソロモン「すまない、アンニヤ！僕は・・・僕はね、ナチスの政権を打倒するた
めにポーランドから来たレジスタンスなんだ」

アンニヤ「・・・ポーランド？」

ソロモン「ああ。ポーランド、チエコスロバキア、オランダ、オーストリア、そ
してフランス。今や各国のレジスタンスは連携してゐる。力を合わせて奴を倒すん
だよ。さもないと、このヨーロッパは取り返しがつかないことになる」

ヤン「そういうことさ、アンニヤ。辛いかも知れないけど、今はこの屋根裏部屋
に居るのが一番安全だ」

アンニヤ「ヤン？あなたもレジスタンスなの？」

ヤン「いや、僕はしがない新聞記者さ。だけど時々、こうして同胞の手助けをし
てる」

アンニヤ「同胞？」

ヤン「ああ。でも・・・そろそろ来るかな」

ノックの音。

ヤン「あ、来た来た。どうぞ開いてますよ」

アンニヤ「誰が来たっていうの？あ！まさか、父さんと母さん！」

立ち上がり迎えに行くアンニヤ。しかし入ってきたのはゲシユタポたち。

ソロモン「どうしてここが・・・」

ルドルフ「ご苦労だったな、ヤン」

ヤン「いえ」

ソロモン「ヤン・・・お前まさか・・・俺たちを売ったのか？」

ヤン「ごめんな、ソロモン。このご時世だろ、頭使わないと生き残れないからさ。それにこうでもしなけりや、ユダヤ人の俺が今だに新聞社で働き続けられるわけないだろ？でも驚いたよ、コニーさんの家からとっくに連行されてると思つてたお前が、俺の家に現れるんだもの。しかもアンニヤまで連れて」

アンニヤ「・・・父さんと母さんはどうなつたの？」

ヤン「さあね」

ソロモン「お前がナチスのスペイだつたなんて・・・ヤン・・・貴様！」

ヤン「おつと、お前だつてスペイだろ？が？情報欲しさにハンスの娘をたぶらかそうとしやがつて」

ソロモン「それは！」

ソロモン「あの娘、いいよなあ、悪いけど俺がいただくぜ。バイバイ、ソロモン、最後の審判で会おうぜ」

ヤン「え？どういうことですか？」

ルドルフ「何がだ？お前もれつきとしたユダヤ人だろ。お友達と仲良く、今夜の汽車に乗ればいい」

ヤン「そんな・・・それはないだろ？」

銃で殴られるヤン。

ヤン「うぐつ！」

ルドルフ「調子に乗りすぎたな、ヤン」

連行されていくソロモンとアンニヤ。そしてヤン。

◇アウシュビツ強制収容所

ひとつのお部屋に入れられたソロモン、アンニヤ、そして先に居たマルゴー、アビの2人。泣き続けるアンニヤ。

アビ「大丈夫かい？君」

ソロモン「ありがとう、アンニヤは僕が見ているから大丈夫です」

マルゴー「あらあなた、アンニヤというの？私の妹と一字違い」

アビ「へえ、君の妹は？」

マルゴー「アンネよ」

ソロモン「妹さんは一緒に？」

マルゴー「……収容所の門までは一緒にたんだけど、その後、別れ別れにされてしまったの」

アビ「可愛そうに……」

マルゴー「でもこの収容所のどこかにいるはずだから……きっとまた会えるわよね？」

ソロモン「会えますよ、もう少しで」

マルゴー「え？ 何故そんなことが言えるの？」

アビ「そうだよ。ここはアウシユビツツだよ、君は分かつてのかい？」

ソロモン「ええ……アウシユビツツ……僕らはこう呼びます。オシフィエンチム」

アビ「君、ポーランド人か」

ソロモン「ええ、ここはアウシユビツツなんかじゃない、ポーランドのオシフィエンチムなんです」

マルゴー「それでどうして、妹にまた会えるなんて言えるの？」

ソロモン「戦争はもうすぐ終わる」

アビ「本当かい！？」

ソロモン「ええ！ 僕はレジスタンスです。ナチス・ドイツに蹂躪されたヨーロッパ各国とも連携しています。その情報網から、アメリカとイギリスのドイツ本土への攻撃は激しさを増しています。制空権は連合軍がほぼ握ったと思つて間違いない。ドイツの敗戦は、時間の問題です！」

アビ「そうか、そりやすごいな！ そうなつたら俺たちもここから解放されるんだよな！？」

ソロモン「もちろん！」

マルゴー「すごい！ そうなつたら家族みんなで、パパもママも、みんなまた一緒に暮らせるのよね！？ ああ、早くそんな日が来ないかしら！」

顔をあげるアンニヤ。

アンニヤ「本当？ ソロモン、また家族と暮らせるって……本当に本当？」

ソロモン「ああ、大丈夫だよ。必ずまた会える。信じて頑張ろう」

アンニヤ「うん」

そこにどこからか戻つてくるヤン。

ソロモン「ヤン！ どこに行つてたんだ！？」

ヤン「しー！ でかい声出すなよ！」

アンニヤ「近づかないで！ この人殺し！」

アビ「なんだつて！？」

マルゴー「人殺し！？」

ヤン「……許してくれなんて言わないよ」

アンニヤ「許さない。絶対に許さないわ」

ヤン「……わかったよ。君の好きにすればいいさ……ここに連れてこられてはじめて、自分のしてきたことの愚かさに気が付いた……君の望む死に方で俺

は死ぬよ。だけどその前に、ここから出でていこうぜ」

ソロモン「出ていく？」

アビ「ずいぶん乱暴な話だな。だけど俺たちにも聞かせろよ」

ヤン「なんだこいつらは？」

ソロモン「ついさつき話をしたばかりだ、でも……仲間を敵に売つたりしない、本当の仲間さ！」

ヤン「チツ！」

◇収容所 夜

ソロモン「つまり、この建物の西側の端にある金網のフェンスを、今夜そいつが人ひとり通れる分だけ切つておいてくれるというわけか？」

アビ「大丈夫なのか？ 罷じやないのか？」

ヤン「嫌なら来るな！ もともとお前なんか」

ソロモン「やめる、ヤン！」

ヤン「はん！」

ソロモン「だが確かに問題は、その看守が信用できるかだ」

ヤン「そりや100パーセント信用できるわけじやないだろうが、こうしてたら明日にだつて、あの暗いガス室に放り込まれちまうかもしけない……それだつたらイチかバチか、俺が懇意にしてた元将校のお情けにかけてみるほうが、まだましつてもんだろう？ な？ そうじやねえか？ ……大丈夫、あいつには昔、ずいぶん儲けさせてやつたんだ。うまく逃げられたら、3000マルク払うつて言つてある。がめついあいつのことだ、かならず」

アビ「俺はこの話……のる」

ソロモン「アビ……」

アビ「だつてそつだろ？ どうして俺たちがこんなところで死ななきやなんない！ ？ 俺はオランダのアムステルダムで自転車屋をやつてたんだ。毎日毎日、手を油まみれにして自転車を修理したり、隣の花屋の娘に明日の天気予報を口実にして、なんとかデートに誘おうと頑張つてみたり、毎日毎日、本当に毎日毎日……どうして俺がこんな目に合わなきやいけないんだ！ 俺が何をした！ 俺はまだやりたいことがいっぱいあるんだ！ ……逃げよう……な、ソロモン……逃げよう」

ソロモン「アビ……」

ヤン「ソロモン」

ソロモン「わかつた……やろう」

ヤン「よし」

明滅する光とサーチライト。収容所の敷地。西側フェンス沿いを進む5人。

ヤン「……このあたりのはずなんだけどな」

ソロモン「確かなのか？」

アビ「……！ そこじやないか！ ？」

ヤン「どけ！ ……違う、ロープが絡まつてただけだ」

ソロモン「クソ……」

マルゴー「わあ、見て！すばらしい星よ」

アンニヤ「本当！昔、父さんたちと登ったブロッケン山の夜空を思い出すわ・・・」

もう一度行けるかしら」

ソロモン「・・・大丈夫、必ず行けるよ、必ず」

空を見上げて十字を切るアンニヤ。

アンニヤ「アーメン」

マルゴー「アンニヤ、あなた、クリスチヤンなの？」

アンニヤ「ええ、そうよ」

ヤン「そして、彼女は歴としたオランダ系ドイツ人さ」

マルゴー「まあ！ユダヤ人じやないの？」

アビ「そんな・・・じやあ、なぜこんなところに？」

ソロモン「僕が・・・僕のせいでアンニヤをこんな目に・・・アンニヤ、必ず君をここから助け出すからね、この命に代えても」

アンニヤ「うん。でも必ず一緒に逃げましょ」

ソロモン「アンニヤ・・・」

ヤン「さあ、手分けしてフェンスの穴を探そう」

手分けして探し始める。

アビ「ちきしょう！いくら探してもありやしないじやないか！騙されたんだ！」

俺たちはまた騙されたんだ！」

ヤン「うるさい！静かにしろ！・・・俺は確かに」

ソロモン「あつたぞ！穴があつたぞ！」

アビ「本当か！？」

突然、機銃の銃声が鳴り響き、強い光に照らされる5人。

看守達の声「Bewege dich nicht！」

◇ナチス本部

地下にあるヨーゼフの執務室。

ヨーゼフの横にはルドルフ。沈痛な面持ちのハンス。

ヨーゼフ「ハンス、君はこの戦況をどう捉えている？」

ハンス「ハ！我がドイツ軍は必ずや連合軍の上陸作戦を阻み、第三帝国樹立に向けて邁進するであろうと」

ヨーゼフ「もういい！聞いた私が馬鹿だつた。そう答えるしかないものな」

ハンス「いえ、私は本当に」

ヨーゼフ「嘘をつけ。イギリス軍の空爆は昼夜の区別なく好き放題行われるようになり、ベルリンは今では瓦礫のオブジェと化した。おかげで総司令本部は地下にもぐり、總統（フューラー）はじめ幹部連中はモグラのごとき暗闇生活を余儀なくされている」

ハンス「・・・しかし」

ヨーゼフ「勝てる気なんてしてないだろう。おそらく總統（フューラー）さえもな。しかし・・・引き下がることなど出来るわけがない！アーリア人の誇りとナチス・ドイツの名譽にかけて！」

ヨーゼフ・ルドルフ「（揃えて） ハイル・ヒトラー！」

ハンス「・・・・・」

ヨーゼフ「ハンス、地下室の特徴はなんだかわかるか？」

ハンス「？・・・いえ」

ヨーゼフ「いいよ、ハンス。もう楽にしてくれ。約束したろう？三人だけの時は、ユーロント時代のとおり、階級も役職も忘れて、あの頃のままの友人に戻ろうつて。そうだよな？」

ルドルフ「

ルドルフ「は」

ハンス「それでは・・・アドラー大臣、あ、いや、ヨーゼフ、こんな時に時間を割いてもらつたのにはわけがあつて」

ヨーゼフ「焦るなよ、ハンス。俺の質問が先だ。地下室の特徴はなんだ？ん？わかるか？」

ハンス「地下室の・・・特徴？」

ヨーゼフ「そうだ、簡単だろ？地下にある！なんてのは駄目だぞ（笑）」

ハンス「・・・・・」

ヨーゼフ「教えてやろうか？」

ハンス「・・・ああ」

ヨーゼフ「まずいいところはだな、窓がないから、集中できる。雜音もない。時間きえない。思う存分自分の考えに没入できる。思索には最高だ」

ハンス「・・・・そうか」

ヨーゼフ「しかし悪いところもある。聞きたいか？」

ハンス「・・・聞かせてくれ」

ヨーゼフ「食欲がない。何も食べたくなくなる。お前も知つての通り、俺の楽しみはしやべることと食べることだった。そうだよな？」

ルドルフ「は」

ヨーゼフ「この4日間で私が口にしたのは、レーズンと焼栗に、バームクーヘン4分の1だ。どうだ？ 少ないだろ？」

ハンス「・・・・そうだな」

ヨーゼフ「そうだなじやない。問題だぞ、これは。だが、頭だけはどんどん冴えてくる。聞いたことがある。同盟国の日本には、自ら食事を絶ち、生きたまま墓に入り、少しづつ死んでいくブディスト達がいたそうだ。心配なんだ、知らぬ間に私も、そんな風になつてしまつたんじゃないのかつて。どうだい、ハンス。私はまだ生きてるよう見えるか？」

ハンス「・・・・・」

ヨーゼフ「（笑）それで、今日は何の話をしにきたんだ？」

ハンス「・・・ああ・・・実は、救つてもらいたい人間がいる」

ヨーゼフ「だれだ？」

ハンス「アンニヤ・ローゼンハイム。オランダ系ドイツ人、私の友人の娘だ」

ヨーゼフ「何があつたんだ？どこにいる？」

ハンス「・・・わからない」

ヨーゼフ「わからない？」

ハンス「・・・ルドルフなら、わかるはずだ」

ヨーゼフ「なぜだ？」

ハンス「彼女を連行したのは・・・ルドルフだからだ」

ヨーゼフ「本当か？ルドルフ」

ルドルフ「はい、連行しました。ローゼンハイム一家はユダヤ人のレジスタンスを自宅に匿う支援者でした。娘はレジスタンスとともに逃亡していったところを押された、つまり現行犯です。現在はアウシユビツツへ移送されたはずです」ハンス「なんだつて！アンニヤをアウシユビツツに・・・なんてことだ・・・頼む！ヨーゼフ！いやドイツナチ党アドラー大臣にお願いする！彼女を、アンニヤを助けてやつってくれ！頼む」

ヨーゼフ「そうはいつても、レジスタンスと一緒にいた者をそう簡単には」ハンス「あの子は何も知らずに連れ去られただけなんだ！レジスタンスはアンニヤをいざという時の人質として連れていったんだ！だから、だからあの子をあんな、アウシユビツツだなんて、どうか、ヨーゼフ！」

ヨーゼフ「どうする？ルドルフ」

ルドルフ「あなたにまかせますよ。ヨーゼフ」

ヨーゼフ「わかった。言つておこう。アウシユビツツの“死の天使”が微笑みかける前にその娘を見つけ出せとな」

ハンス「ありがとう、ヨーゼフ・・・恩に着る」

ヨーゼフ「終わりか？」

ハンス「・・・ああ」

ヨーゼフ「では、帰れ」

ハンス「・・・失礼した」

部屋を出ていくハンス。

ルドルフ「いいんですか？ハンスはキリスト教徒です。だいたいあなたは、昔からハンスに甘い」

ヨーゼフ「なんだ？嫉妬しているのか？」

ルドルフ「・・・」

ヨーゼフ「地下室のいいところがもう一つあった」

ルドルフ「・・・」

ヨーゼフ「中の音も世界には聞こえないことだ」

◇ガス室

逃げ損じて連れ戻され、数日後、ガス室に連れてこられた5人。

アビ「ちくしょう！もう少しだったのに！なぜあの時撃たれてもいいから、フェンスを潜り抜けて逃げなかつたんだ！ちくしょう！ちくしょう！」

マルゴー「やめて・・・出来なかつたこと悔やんだつて、もう仕方ないじやない」

アビ「貴様だ！貴様があんなデマを持ち込んでこなけりや、俺たちはまだ生きていたはずだ！」

ヤン「ふざけるな！俺はお前なんか誘つちやいないぞ！お前が自分で、望んでこの話に加わったんだろうが？呪うなら自分の血と、ツキのなさを呪うんだな」
アビ「なんだと！」

マルゴー「やめて！もうやめて……ここがどこだか、わかつてんんでしょ？」
ヤン「……ああ……アウシユビツツの悪名高きガス室だよ」

マルゴー「……今、何時頃かしら……」

ヤン「……」

マルゴー「アンネが……妹のアンネがね、誕生日なの」

ヤン「……誕生日？」

マルゴー「ええ……私が数え間違えてなければ、今夜12時を回れば6月12日、アンネの誕生日よ」

ガス室に入つてくる看守に連れられたシスター。

シスター「今日は4月11日、明日はまだ4月12日よ」

ソロモン「シスター！どうしてここに！？」

アンニヤ「シスター！（泣）」

マルゴー「……そんな……2ヶ月も数え間違えてたなんて……そんな……」

シスター「アンニヤ、かわいそうに……」

ソロモン「シスター、ご無事だつたんですね……よかつた」

シスター「ソロモン……」

アンニヤ「そうだ、シスター、父さんと母さんはどうしたの？無事なのよね？元気なのよね？」

シスター「……」

アンニヤ「シスター？……ねえ、シスター、何か言つてよ、大丈夫なのよね？父さんたち、生きてるのよね！？」

ルドルフが入つてくる。

ルドルフ「ああ、生きているよ。大丈夫だ、アンニヤ・ローゼンハイム」

アンニヤ「……本当？」

ルドルフ「私を信じなさい」

アンニヤ「……」

ルドルフ「ハンス少佐を知つてているね？ハンス・ゲルト、君の父上の親友だ」

アンニヤ「……ええ」

ソロモン「アンニヤ、答えるな、罷かもしれない」

アンニヤ「でも、ハンスおじさんよ……」

ルドルフ「ハンス少佐が君を助けるように私の上司に頼みに来た。彼と私はヒトラー・ユーゲント時代の先輩後輩の中での、非公式ではあるが、私は引き受けた。君を助けよう」

ソロモン「本当か！？アンニヤをここから出してくれるのか？」

アンニヤ「みんなは？みんなも一緒にやなきや嫌、一人だけ助かるなんて、私出来ない」

ソロモン「駄目だ、アンニヤ、君はいくんだ！僕らは僕らの運命を受け入れる。」

だけど君は関係ない！君はドイツ人だ、ここで殺される理由なんて一つもない」
アンニヤ「ユダヤ人が殺される理由だって何ひとつないわ！だってこんなのおかしいもの、運命なんて受け入れないで！いやよ、ソロモン、一緒にいたいの、一緒じゃなきやいや！いや……」
ソロモン「……ありがとう、アンニヤ……だけど、お願ひだ、君だけでも助かってくれ。そして世界中に今言つたことを伝えておくれ。僕らが殺されなきやいけない理由なんて、何一つなかつたんだつてことを！」

引き離されるソロモンとアンニヤ。

ソロモン「アンニヤー！」
アンニヤ「ソロモン！」

アンニヤを連れて出でていくゲシュタポたち。
ドアと鍵のしまる音。

ヤン「・・・シスター？」

シスター「私はあなたたちに最後の祈りを捧げにきたのよ」

ソロモン「最後の・・・祈り？」

シスター「ええ」

アビ「怖いよ・・・どうなつちやうんだよ、俺たち、怖いよ」

シスター「しつかり手をつなぎなさい。私も一緒に天国に行くわ」

ヤン「なんだって・・・」

ソロモン「ニーナ・・・ニーナ・・・愛するニーナ・・・ごめんよ、ごめんよ・・・」

シスター「ねえ、ソロモン、あなたとニーナがソウルメイト、魂の伴侶であるならきっとまた、必ずまた彼女に会えるわ。どんなに離れていても、どんなに時が巡ろうとも。いいわね？」

ソロモン「・・・はい」

シスター「天にましますわららの父よ、願わくは、御名の尊まれんことを、御国の來たらんことを、御旨の天に行わるる如く地にも行われんことを。わららの日用の糧を、今日わららに与え給え。わららが人に赦す如く、わららの罪を赦し給え。わららを試みに引き給わざれ、わららを悪より救い給え。アーメン」

徐々に充満してくるガス。

◇ドイツ郊外

さわやかな森の奥の草原。花を摘むアンニヤ。アンニヤを探しに來た少女・フローラ。

フローラ「アンニヤー。アンニヤー！どこに行つたの？兄さんが心配しているわ」

アンニヤ「アンニヤ？・・・わたし・・・」

フローラ「アンニヤ！もうアンニヤつたら、また勝手にこんなに遠くまで来てしまつて、何かあつたらどうするのよ」

アンニヤ「うふふ」

フローラ「まあ、いいわ。また私が探せばいいんだし。ね？アンニヤ」

微笑み花摘みを再開するアンニヤ。

フローラ「そうだ、あのね、アンニヤ。アンニヤを訪ねてお客さまが来てるのよ。だからもう家に帰りましょう？ね？」

アンニヤ「うふふ」

花摘みを続けるアンニヤ。そこにフローラの兄・カールがハンスとニーナを連れて現れる。

カール「アンニヤ、ここに居たのか。フローラ、ありがとう。もういいよ」

フローラ「ううん、アンニヤは私の友達だもの、全然かまわないわ。いつでもどうぞ」

カール「アンニヤ、君にお客さんだ。どうしても、早く君に会いたいらしくて。一緒に来てしまったよ」

ハンス「・・・アンニヤ」

ニーナ「アンニヤ？・・・アンニヤ！」

アンニヤ「・・・あなた、誰？」

ニーナ「アンニヤ？どうしたの？私よ、ニーナよ」

アンニヤ「ニーナ？・・・ごめんなさい、知らないわ」

ニーナ「アンニヤ・・・」

カール「・・・ゲシュタポの将校がこの子を預けに来た時、すでにもうこんな状態でした。自分の名前さえ分からなくて」

ハンス「記憶・・・喪失？」

カール「さあね。記憶がないというよりは、覚えられないみたいな感じです。いや、覚えたくないのかな、さぞ辛い経験をしたんでしよう。だけど妹のフローラは懲りずに毎朝、“私はフローラ。あなたはアンニヤ。いい？覚えた？”ってやつてますがね。ここは人がほとんどいない田舎ですから、フローラは嬉しいみたいで」

ハンス「ルドルフは、ゲシュタポの将校はなぜアンニヤをここに？」

カール「よくは分からないけど、人が少ないから空襲もあまりなくて、比較的安全だからでしょう。1年分の世話代なんかももらつちゃつたし・・・妹を養わなければいけないから・・・それになんといつても、ナチスの命令を断れるわけがない」

ハンス「そうか・・・だが、ルドルフは・・・あいつはアンニヤに何をしたんだ・・・この子をこんな目にあわせるなんて」

カール「旦那、この国はどうなつちやうんですか？」

ハンス「分からない・・・私は分からなが・・・總統（フューラー）は、ヒ

トラー閣下は・・・昨日、亡くなつた」

カール「え！それは本当ですか？」

ハンス「我がドイツ軍は、敗北する・・・總統（フューラー）なき今となつては、時間の問題だ」

カール「戦争が終わる・・・戦争が終わる！やつた！ついにこのクソみたいな戦

争が終わるのか！フローラ、聞いたか？戦争が、戦争が終わるんだぞ！」

ハンス「……くそ！間に合わなかつた！……1ヶ月月、あと1ヶ月早ければ、

こんなことには……こんなことには！」

N「忘れもしない4月30日。あの男は自らに撃鉄を引き、命を絶つた。本当は私も死んでしまったかつた。だけど父が心の病を患つてしまい、そんな父を残して死んでいくことも出来なかつたの」

◇診察室

クロフォード医師「ここにちは。精神科医のクロフォードです。昨日からあなたのお主治医になりました。覚えてらっしゃいますか？」

ハンス「……ああ、先生。覚えています」

医師「よろしい。今日もすこしづつ記憶を整理していきましょう。いいですか？」

ハンス「先生、私は……私は！」

医師「落ち着いて。まずは目を閉じて、ゆっくり深呼吸をしてください」

ハンス「……」

医師「落ち着きましたか？」

ハンス「はい……」

医師「それではゆっくりと心の奥底へ降りて行つてください。ゆっくりでいいですよ」

ハンス「……ああ……」

医師「では昨日の続きです。何が見えますか？」

ハンス「アウシユビツツの強制収容所だ……ああ、すまない、許しておくれ」

医師「なぜ謝るのですか？あなたは今、どこにいるのですか？」

ハンス「……車の中だ。コニーの家に行くとゲシュタポがコニーとリーケの遺体を運び出していた。その車を尾行したら、このアパートに着いた」

医師「それから？」

ハンス「しばらくすると、アパートからアンニヤとソロモン、それからヤンが連行されて出てきた。私は車を飛び出してルドルフに詰め寄つた。しかし奴は……」

医師「どうしました？」

ハンス「ユダヤ人と、それをかくまつていた者。どちらも同罪、強制収容所行きだと……私は、友人の娘と、自分の娘の好きな男を助けることが出来なかつた……」

医師「なぜですか？」

ハンス「私は……何も言えず、何もできず、結局、そのまま……自分がわいさに、彼らを見捨てたんだ……（号泣）」

医師「ハンスさん、あなたのせいじやない。戦争ですよ。すべて戦争のせいだつたんですよ」

◇ヨーゼフの執務室

ヨーゼフ 「春の花といえば、何だつたかな」

ルドルフ 「スミレ、タンポポ、チューリップ、でしようか・・・私の田舎では木蓮がきれいでした」

ヨーゼフ 「珍しいな？」

ルドルフ 「何がでしようか？私が花の名前など知らないとでも」

ヨーゼフ 「違う。君が自分の田舎の話をするのは初めてだ」

ルドルフ 「そうでしたか？・・・しかし、あなたこそ花の話なんて」

ヨーゼフ 「終わりだな」

ルドルフ 「・・・お諦めになりますか？」

ヨーゼフ 「もともと嫌いだ、戦争なんて」

ルドルフ 「・・・好きなものなど、いるのでしょうか？」

ヨーゼフ 「閣下はお好きだったろう。『わが闘争』、歴史的ベストセラーだ。駄文

だがね」

ルドルフ 「まさに」

ヨーゼフ 「死んだ者を悪く言う趣味はないが、部下を見捨ててさつさと自決するとは。しかも遺書によつて、私を後継者に指名した。いい迷惑だ・・・」

ルドルフ 「お供しますよ、ヨーゼフ」

ゲッペルス 「悪いな、ルドルフ一人は嫌いなんだ」

お互い、銃を抜き銃口を相手に向ける。とどろく一発の銃声。

◇ニーナの庭

サニー 「(しきしき泣いている) おばあちゃん、かわいそう」

ニーナ (93歳) 「ありがとう、サニー。・・・悲しい時代だつたわね。何が正しいのかもわからないような。でもね、恋する気持ちだけは、誰が何と言おうと本物だつた。だから、恋をしなさい。恋をすれば全部わかるわ。あなたが何者で、どうして生まれてきたのかも全部。さ、お茶をもう一杯どう？」

愛犬ソロモンの心配げな甘えた声。

おわり